

時は満ちた

奨励	原 誠〔はら・まこと〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	日本とアジアのプロテスタント教会の歴史

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

(マルコによる福音書 1章14―15節)

新しい年度

本来ですと、今年4月に同志社大学の副学長に就任してくださいました山田先生が第1回目の水曜チャペル・アワーで奨励をする予定でありましたけれども、インフルエンザにかかって外出してはいけないという厳命を受けたために、急遽ピンチヒッターという形で私が奨励をすることになりました。

「時は満ちた」ということをテーマに聖書から取りあげてみました。新しい年度を迎え、今週から授業が始まりました。とりわけ1年生の皆さんは先週入学して履修登録をして、今、授業の1回目が始まったというところで、希望や期待もあれば戸惑いや不安もある、そういう時を過ごしているかと思います。

上級生の皆さんは学年が一つづつ上がり、場合によっては就職が、などのいろいろな思いを巡らせねばならない人もいるかもしれません。また、大学全体で言うならば、卒業式を経て多くの学生を社会に送り出し、また多くの学生を得て入学式を行いました。多くの教職員の方々が昨年度末で退職されたり、また新しい教職員の方々を同志社は迎えたりと、そういう「時」を今、過ごしております。そして、さまざまな意味で「時」に関心を持ちます。

「時」について―クロノスとカイロス

「時」について考えてみたいと思います。聖書がどういう教えであるのかを考えてみたいわけです。すでにご存じの方もおられるかと思いますが、私たちが一般的によく使う、よく読むのは、お手元の聖書の後半部分の新約聖書です。そしてその後半部分の冒頭にあたるのが、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる四つの福音書です。いささか誤解を招くかもしれませんが、ごく単純に言えば4人の使者によるイエスの生涯を記したものが、その四つの福音書と言えます。聖書の研究者がいろいろと研究した結果、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネという四つの福音書のなかで一番古くに書かれたのは、マルコによる福音書であろうというのが、今、我々の業界では定説となっています。

つまり、そのなかの1節を、先ほど読んだわけですね。マルコによる福音書「神の子イエス・キリストの福音の初め」(1章1節)。この言葉の書き出しから、マルコという福音書ができていったわけですね。ここに洗礼者ヨハネが出てきて、そしてその後、今日の聖書の箇所が出てきます。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣(の)べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」(14―15節)。

これはどういうことかということ、ヨハネが捕らえられた後、その当時の政治や宗教や文化のさまざまな矛盾や争いがあり、そのなかにイエスも巻き込まれたということです。ヨハネが捕らえられたから、イエスはガリラヤへ行った。そういうことをぜひ私たちはこの短い聖書のなかから読み取りたいのです。その聖書の言葉が私たち一人ひとりに生きてかかわってきます。

「時は満ちた」。これはイエスの活動の最初の言葉であります。最初に歴史のなかでイエスが語った言葉が「時は満ちた」という言葉になります。この言葉が、実は私たちキリスト教の世界では非常に大きな意味をもつのであります。「時」というのは、私たちは日本語で「とき」と読むわけですが、聖書の本文は、ギリシア語で書かれています。そしてそのギリシア語では二つの言葉があります。一つは「クロノス」という言葉で、もう一つは「カイロス」という言葉です。どちらも「時」と訳します。この聖書の箇所の「時は満ちた」というのはどちらを使っているかと言うと、「カイロス」というギリシア語を使っていて、そしてそれが「時」と訳されています。

では「クロノス」とは何かと言うと、私たちの世界で言うなら、英語の「ten o'clock」とか「eleven o'clock」とかの「時間」という意味です。これをもう少し具体的に言うと、私たちの喜怒哀楽・人生・歴史と全く関係なく平等に、24時間、60分、1時間、好きも嫌いも、悲しんでいようが喜んでいようが、混乱していようが戸惑っていようが、確実に1秒1秒過ぎていく時間です。つまり、「7時の時報をお知らせします。プ、プ、プ、プーン」、そういう形で私たちの生き方や世界と関係なく、確実に1秒1秒、そして1分1分、1時間、24時間、そして1年間が過ぎていく、そういう「時」というわけです。

人生にかかわる「時」

しかし、人によってはその意味ではなく、人生のなかで決定的な出会いがあったという意味でのそういう「時」があります。このときに、「カイロス」という言葉が使われます。分かりますか。たとえば「〇月〇日、あの人の誕生日だ」。その人にとってみればその「〇月〇日」というのはとても大切なことですし、とりわけ両親にしてみると、この時期こういう状況で、我が息子が、我が娘が生まれたというのは、人生においてとても大切なことですね。そしてまた、もう少し別のたとえを挙げると、これも私ぐらいの年寄りになってくると記憶のなかのどこかにあるんですけども、若い人にとっては、もっとシリアスなというか、大変な話でしょう。「〇月△日、どこで、何時に、どういう状況のなかで私はあなたに告白をした」。ベラベラベラベラ一日中「愛してる、愛してる」と10回も20回も言うような話ではなくて、人生において全存在をかけて告白をする。そしてそれが受け入れられた。あるいは撥ねられた。結果はいろいろあるのだけれど、その人にとってみれば、その「時」は「カイロス」ですが、私にしてみれば、あの若い男と女が何だ、というだけの話で、それはclock、「クロノス」です。しかし一人ひとり、私たちは人生のなかでかけがえのない時に会っていくということがあり得るのです。今、私は人間関係やこの世界のことと言っていますが、場合によれば、事柄によってはもっと決定的に人生を左右するような、そういう出来事と出会うこと。つまり、人間を超えた神の意思・神の計画と今、出会うこと。これが本当の意味での「カイロス」なのです。

もしかしたら私たちは、それがある状況のなかで、ある局面で、一瞬のうちに「ああ、神と出会った」というふうに期待する気持ちがあるのかもしれませんが。しかし私の限られた経験から言えば、そういうふうに一瞬「神の光を見た」と思うような経験もあるのかもしれませんが、多くの場合、振り返って考えてみるとそうではないのです。「あの時に、あの事柄と出会ったな」、「あの先生と出会ったな」、あるいは「ある文学の、あの言葉で人生の新しいステージが見えてきた」とか、もしかしたら「ドラマのなかのあのセリフが、あの1コマが」ということであったかもしれませんが。それが音楽であるかもしれませんが、いずれにせよ、社会的なさまざまな現象のなかでそれを読み取って「ああ、これか。人間を超えたこの出来事」ということや神の支配、そういうことを振り返ってみて「こういうことがあり、ああいうことがあり、そしてこういうことがあって、私の人生はこういう生き方へと導かれていった」ということ、あるいは「決断をした」ということが、ここで言う「時は満ちた」ということであります。

そして聖書はさらに続きます。「時は満ち、神の国は近づいた」。神の国、これは天国と訳されることがありますが、天国というと、なかなか私たちの世界のなかではピンとこない言葉かもしれません。神の国、これもピンとこないかもしれません。では、どういうことであるかということ、これは神の支配するところです。神の支配とは、神の意思・神の計画が私たちの一人ひとりの人生において、また私たちの世界全体において充滿していること、という意味です。神の支配や、天国、神の国と言うと、なかなかピンとこないかもしれませんが、「神の意思が充滿しているところ」ならどうでしょう。

神の支配するところ

これは具体的にどういうことか。先ほどの越川先生の祈りのなかにもありました。今、この時代、この世界にあって涙している者が一人でもいれば、それは神の世界が完成していない。一人でも飢えている者がいたら神の支配が完成していない。もちろん国際政治とか、国際経済とか、さまざまな出来事に翻弄され、もしかしたら今日10日は、北朝鮮から「何か」飛来する、というようなことも懸念される、そういう状況のなかで生きている私たちの世界があります。しかしここで申し上げるのは、キリスト教の立場は、そういうものではない。そしてそれはキリスト教だけの話ではなくて、イスラム教であろうと、ヒンドゥー教であろうと、無宗教であろうと、神道の世界であろうと、です。それを貫いて、一番根源にある神の意思というものを私たちは考え、そこに注目する。「神の国は近づいた」という、その支配が、今、まさに近づいている、始まっているという、このことが聖書のなかでイエスの宣言として最初に語られているということでもあります。

さらにこのことは、今日の聖書箇所の最後の「悔い改めて福音を信じなさい」という言葉につながっています。この「悔い改めて」というのも私たち日本語の世界で、あるいは私たちの日常生活で、よくあることです。朝起きて、「今日は、これだけの仕事をしよう。こういうことをしよう。授業のためにいい準備をしよう」と、こう思うわけですね。しかし目の前になると「ああ、できなかった」というようなことで悔い、夜寝る前に「今日もだめだった」と思って、打ち萎れて寝てしまう、というのが私たちは頻繁に(私は頻繁に)あるわけですね。「明日こそ、悔い改めて」の「悔い改めて」という言葉の意味に取りがちです。

しかし、これもギリシア語の聖書の本当の意味で分かりますかと言うならば、「優先順位の組み換え」となります。遺伝子の組み換えというのはよく聞く言葉でありますけれども、優先順位の組み換えというのが、この「悔い改めて」の本来の意味です。「メタノイヤー」というギリシア語の言葉が使われています。何が一番大切なことなのか。私の人生にとって、私の生き方にとって。そして私が生きているこの世界にとって、何が一番優先順位の高い、最も大切なものなのか。もちろん私の命であり、私の生活であり、私の学習であり、私の将来であります。そして偏差値が、お金が、あるいは入社する会社の格が、とか、いろんなことが私たちの周りにあって目を奪われていく。多くの場合、それらは合理的であるかのように見え、そして美しく美しいものに見える。悪魔と言うと、私たちはなんとなくおぞましく、黒っぽい装束を着ていて、ぼんちと飛び上がっているような、いかにも悪々しい、それらが襲ってくる姿を想像しがちですが、しかし多くの場合、悪魔から襲われているという気配がない。感覚がないわけではないのですが、見目麗しく、好ましく、ぜひ食べてみたいと思う

ような形で誘惑してくるものなのです。そういうもののなかで、優先順位、一番大切なものは何かを、私たちは一人ひとり考えることができます。

愛する家族というのは何であるのか。家族を愛せないというのはどういうことなのか。あるいはまた友情など私たちの社会で生きていくときに一番大切なものは何なのか。そして、自分が生きていくために、相手を蹴飛ばしてでも相手を叩き潰してでもというような生き方をするのかどうか、という事柄として「悔い改めて」という意味になります。さまざまなものによって私たちは囚われています。お金であったり、社会的地位であったり、偏差値であったり。そしてそれらのものから悔い改めることによって解放されていく。誤解しないでください。一生懸命勉強をして、いい成績をとることは悪いことでは、もちろんありません。それらはしかし、決定的に、絶對的に、言葉の正確な意味で絶對的なものなのか、相対的なものなのか。その判断をするというのが、ここでいう「悔い改めて」ということです。

優先順位の組み換え

そして「福音を信じなさい」と言うと、直接的には「イエス・キリストの教えを信じなさい」ということを意味しますが、この福音というのは、それらから解放されて自由にされていくことです。福音というのはGood newsです。ですから、今ここで苦しみ、涙したとしたら、この教えは自由になり、解放されていくための喜びの手段となります。このことが実は聖書の、キリスト教の、イエスの根本的な教えであります。

でありますから、私たちが今日、耳にしたその「時」というのが、願わくば皆さんの長い人生のなかで一つの「カイロス」として植えつけられていけば、もう少し言えば、同志社大学の4年間の生活でそれぞれの学部へ属し、そしてサークル活動やアルバイトでさまざまな経験をしていくなかで、そのようなものと大切に向き合うような「時」であってほしいと思います。それが4年の間に芽が出てくるかもしれませんが、卒業した後、5年、10年、30年、40年という自分の人生のなかで種が蒔かれたものがつながっていった、一つの出来事となって「カイロス」ということになるかもしれません。これは私たち人間のできることではなくて、人間を超えた神のなせる業であり、それが一人ひとりの人生のなかに、どういうふうにかかわっていくのか。少なくとも願わくば、同志社というこの教育機関が、そういう機能や役割を果たし、そして先ほどの越川先生の祈りのなかにもあったミッションを私たちも分かち合っていく、そういう教育の共同体になりたいと願うわけあります。

新しい年度を迎えました。一人ひとり、それぞれの課題があるでしょう。直接的な、目に見える課題があると同時に、最も大切な「カイロス」という出来事と向き合える、あるいは向き合う、あるいはそれを期待する、そういう学生時代であってほしいと思うのです。

2013年4月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録